

石川県立美術館だより

平成17年12月1日発行 第266号



望郷を歌う(故高英洋に) 鴨居玲 1981年

没後20年 鴨居玲展

- 私の話を聞いてくれ -

11月10日(木)~12月11日(日)会期中無休
午前9時30分~午後5時(入館は午後4時30分まで)



石の降る街 鴨居玲 1976年



青磁柳鶯文水注 小松市立本陣記念美術館

朝鮮のやきもの

10月27日(木)~12月23日(金・祝)会期中無休
午前9時30分~午後5時(入館は午後4時30分まで)

目次

没後20年 鴨居玲展 私の話を聞いてくれ2
朝鮮のやきもの2
四季山水図襖、至芸の世界3
石川ゆかりの京都の日本画家たち4
今月のコレクション展示室 主な展示作品	...4

企画展TOPIC(黒の迷宮 凝視の刻)5
展覧会回顧(吉田富士夫 手品師の息づかい)	...6
企画展示室、美術館の本7
文化財現地見学報告、12月の行事案内7
所蔵品紹介、ミュージアムショップ通信他8

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

企画展示室(第7~9展示室)

没後20年 鴨居 玲展
- 私のお話を聞いてくれ -

11月10日(木)~12月11日(日)

主催/石川県立美術館 共催/北國新聞社
後援/金沢放送局、北陸放送、石川テレビ放送
テレビ金沢、北陸朝日放送

協力/財団法人 日動美術財団



ミスターXの来た日 1982.2.17



群がる

本展では鴨居の画業を一九七二〜七七年のスペイン・パリ滞在期を中心に、五つの時代に分けて展示いたします。

鴨居の模索期 金沢美術工芸専門学校時代からパステルやグワッシュでシニール(超現実)調の作品を描いた、昭和二十一年〜三十年代末。

晩年の先取りともいえる『夜(自画像)』が注目されます。アンフォルメル旋風が日本の画壇を席巻した昭和二十年代末からの約十年間には、油絵の制作に悩み、水彩やパステルで、後の中に浮かぶ石や空飛ぶ教会に繋がるであろうシニール系統の作品を描いています。

鴨居様式の確立期 南米・パリ・ローマ放浪から二紀展復帰・安井賞受賞の頃。昭和四十〜四十五年。南米をさまよひ、ようやく鴨居は油絵の制作に自信を得ます。帰国後、日動画廊で個展を開き、昭和会展優秀賞、安井賞受賞など華々しい画壇デビューを果たしました。

鴨居様式の発展・展開期 スペイン・パリ時代。一九七二〜七七年。に比して、肉体は自然な人体の形とずつしりとした質量が与えられ、がっちりとしたマチエール(絵肌)を画面は持ちます。油絵具の艶と透明感をこれほどまでに生かし切った画家はまれといえます。『廃兵』『酔っぱらい』『老婆』『教会』、いずれも中へ中へと凝縮していく力に圧倒されます。

鴨居様式の転換・熟成期 帰国・神戸時代。昭和五十二〜五十七年。画面はやや和らぎを見せます。神戸にはスペインの酔っぱらいや老婆はいません。それに代わって裸婦や恋人達といった華やいだテーマが描かれます。そして自虐的自画像の大作、『1982年私』が描かれて、帰国後のピークを迎えるのでした。

晩年の自画像期 『1982年 私』以後。昭和五十七〜六十年。『ミスターXの来た日』、『1982.2.17』、『出を待つ(道化師)』、『酔って候』、『勲章』、『肖像』など、この時期の鴨居の主題は自画像のみといったいいでしょう。もう何も描けない、描くことが無くなったと、こう繰り返し日記に書き付けるように描き続け、鴨居は五十七年の生涯を終るのでした。

高麗時代のやきものは、白磁もありますが、一口で言えば青磁の時代といえます。

李氏朝鮮は高麗時代の仏教にかわり儒教を国教としましたので、儒教の精神にのっとり白が好まれたといわれます。そして、やきものでも白磁が求められました。三島・刷毛目などの白土装飾を施す粉青は白磁の代用品として作られたといわれます。

清廉な白磁が儒教の理念にかなうものとして御器とされ、十五世紀後半には御器を焼く官窯が設置されました。白磁が官窯で本格的に生産されるようになると、粉青は民窯として種々の展開を見せますが、白磁が普及するようになると次第に衰退し、白磁に吸収されていきました。一方白磁の方は、染付、辰砂、鉄砂など多彩な展開を見せました。

三島内贍印鉢

三島は李朝時代の民窯で焼かれた白土象嵌の陶器を日本という呼称です。語源としては、三島大社が発行している曆(三島曆)の字配りが、三島の象嵌文様と似ているからとする説が有力で、曆手ともいいます。印で表された内贍は宮殿供物を司ったところを表しています。このほかには、賓客接待を司る礼賓、調租の収納を司った役所の長興庫、また内資寺、仁寿府、公黄、大、山、司などの文字が使用されています。この鉢では、内贍の文字そのものが、見事な文様の美を示しています。

染付草花文花生

朝鮮の染付磁器は、李朝前期の十五世紀に中国の影響を受けて始まり、やがて独自の作風が形成されました。その特色は青料の淡い発色と白地の余白を十分に取り、さりげなく描かれた絵の趣にあり、しばしば見られる秋草風の文様から、この手の製品は日本では秋草手と呼ばれます。この花生も秋草手特有の繊細で叙情的な文様に、優しく大らかな器の形がよく調和しています。

今月のコレクション展示室
(第2展示室)

特別陳列
朝鮮のやきもの

10月27日(木)~12月23日(金・祝)



染付草花文花生
金沢市立中村記念美術館



三島内贍印鉢
見込

今月のコレクション展示室

(前田育徳会展示室)

特集

四季山水図襖

11月30日(水)~12月23日(金・祝)



冬景山水図 橋本雅邦筆

「四季山水図襖」は明治三十八年(一九〇五)頃に東京本郷の前田侯爵邸に新築された和邸の襖絵で、近代日本画黎明期の巨匠の橋本雅邦が描きました。

襖絵と障子の腰、戸袋を含め三十面が伝えられています。ちなみに明治四十三年、前田邸への明治天皇・皇后行幸啓に際して、明治四十年に建設された西洋館とともに使用に供されました。

図様は四季の山水風景を水墨で描くもので、所々に薄く金泥をひき、清冽な空気を感じさせています。

技法の特徴は、伝統的な画題にたちながらも、山や木などのモチーフは伝統的な輪郭線を抑え、部分的に陰影を付けて立体感を生むよう努めるとともに、近景は克明に遠景は淡く描いて奥行をとる空気遠近法などの西洋絵画の技法をとり入れていることです。

筆者の橋本雅邦(一八三五~一九〇八)は、江戸末挽町の狩野邸で、絵師の橋本晴園養邦の子として生まれました。狩野勝川院雅信に入門し修行に励み二十歳で勝川院の塾頭になります。同門に門下の双壁と讃えられた狩野芳崖がいました。明治維新が興ると絵師たちの生活は困窮を極め、雅邦も海軍兵学寮で図学教師を勤めたり内職をして生計を立てることとなります。また製図係の職にあつた間に、西洋画技法の習得にも資したと考えられています。

そんな中、明治十七年(一八八四)内国絵画共進会の雅邦の出品作品が銀牌一席となり注目を集めるようになり、さらにその頃、わが国に招聘されて東京大学で哲学や経済学を講じ、日本美術研究を進めていたフエノ口サとその弟子の岡倉天心に出会い鑑画会設立に参加します。明治二十三年には東京美術学校の初代日本画教授に就任、同年、帝室技芸員となり近代日本画の創出と伝統絵画の革新・立て直しを進めました。また横山大観、下村観山、菱田春草など後進の育成にも務めました。明治三十一年には日本美術院の創設に参加して主幹として活躍しました。

石川県で生活をしていると、何気ない暮らしのなかで、工芸にふれる機会が多くなると思います。つくることが知らなくても、その材質にはいちどは触れることがあったり、そのものを何気なく、また、じっくり見たりしている機会があり、知らず知らずのうちに美しいものにかこまれていく環境が当たり前のようになっていきます。

石川の地は、江戸時代に加賀藩主前田家の美術工芸に対する積極的な施策によって、工芸技術の高い水準が維持されている地域です。陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・諸工芸と、そのほとんどの分野で技が磨かれ、その流れは今日まで絶えることなく続き、作家の層も厚く、数多くの工芸家を輩出しています。また、その多くの作家として活躍していく人々が、なよりの名譽としているのは、日本芸術院会員の任命や、重要無形文化財保持者(人間国宝)の認定であり、文化勲章の受章であることは言うまでもありません。

今回の特集では、当館の所蔵する数多い工芸品の中から、石川県出身、また縁あってこちらに所蔵された芸術院会員と、重要無形文化財保持者(人間国宝)の作品に絞り、その作品の力を長い会期でゆっくりご覧頂いております。

芸術院会員でもあり、人間国宝でもあった松田権六氏の「蓬萊之棚」ほか、後期展示で入れ替えて展示しております木村雨山の「染色馬二曲屏風」など、第5展示室に並んでいる全ての作品が、芸術院会員・人間国宝の作品であり、その様は圧巻となっております。石川県の工芸の力をよりいっそう感じていただければ幸いです。

今月のコレクション展示室

(第5展示室)

特集

至芸の世界

- 石川ゆかりの芸術院会員・人間国宝 -

10月27日(木)~12月23日(金・祝)



染色馬二曲屏風 木村雨山

今月のコレクション展示室
(第6展示室)

特集
石川ゆかりの
京都の日本画家たち

10月27日(木)~12月23日(金・祝)



舞扇
坂根克介

当館の所蔵品約二八〇〇点のうち、近現代の日本画は二六五点(平成十六年度末)を数えます。その多くが、昭和の戦後から今日に至る期間に制作されたもので、作者は石川県にゆかりのある画家が多数含まれています。たとえば、石川県出身の作家、金沢美術工芸大学に学んだ作家、また同校で後進の育成にあたった作家など、何らかのかたちで石川の風土に接し、制作活動を行っていった人々です。その中で、京都を活動の拠点として活動を続けた作家たちの作品も、当館の近現代日本画コレクションの中で重要な位置を占めているといえます。

今回の特集展示では、当県出身で京都に出て研鑽を積み、その後京都に住んで活動してきた作家たち(安嶋雨晶・曲子明良・大沼憲昭)、あるいは、金沢美術工芸大学で教えるため来沢した京都在住の作家(西山英雄・曲子光男・山本知克)、また同大学で学んだ後、京都で作家活動を続けていった作家(石川義・由里本出・坂根克介・沢野慎平・鹿見喜陌・山本隆)をとりあげ、館蔵品を中心に、十七点の力作をまとめて展示いたします。

こうした作家たちは、京都画壇の重鎮であった堂本印象の画塾・東丘社で腕を磨いていったグループと、金沢美術工芸大学に教授として招かれた西山英雄に師事した人々が多く見られますが、その表現は、石川の豊かな自然を感じさせる詩情あふれる作品もあれば、京都画壇の伝統と創造の上に生み出された、現代日本画の動向を反映する重厚な作品など様々です。とにかく、一人一人の作家が確かな技術の上に立ち、それぞれ個性豊かな作風を展開しており、本展では、その多彩な美の輝きをご覧いただければ幸いです。



一般 350円	個人	高校生以下は 無料	団体(20名以上)	一般 280円
大学生 280円		大学生 220円		
高校生以下は 無料		高校生以下は 無料		

<p>●色絵雉香炉 野々村仁清 (十一月六日より展示)</p>	<p>●色絵雌雄香炉 野々村仁清</p>	<p>●青手桜花散文平鉢 古九谷 色絵鶴かるた文平鉢 古九谷 特別陳列 朝鮮のやきもの 2ページをご覧ください。</p>	<p>●油彩画・彫塑</p>	<p>●彫塑 川岸要吉 雨あがり 舞姫 得能節朗</p>	<p>●第5展示室(工芸) 特集 至芸の世界 石川ゆかりの芸術院会員・人間国宝 黒柿造喰籠 脇指 銘傘笠正峯作之 平成七年二月日 截金彩色合子「花守犬」 友禅訪問着「越前花野」 羽田登喜男 西出大三 三谷吾一</p>	<p>●第6展示室(日本画) 特集 石川ゆかりの京都の日本画家たち 大沼憲昭 求餌図 山本隆 質屋 由里本出 冬山 観覧料</p>
---	--------------------------	--	----------------	--	--	---



女
鈴木博



雨あがり
川岸安吉

今月のコレクション展示室
主な展示作品

前田育徳会展示室:11月30日(水)~12月23日(金・祝)
第2~6展示室:10月27日(木)~12月23日(金・祝)

● = 国宝 = 重要文化財

企画展 TOPIC

黒の迷宮 - 凝視の刻 -
木下 晋・小林敬生・日和崎尊夫 第3回

ひ わ さ き た か お
闇を刻む詩人 - 日和崎尊夫

来年の当館企画展は、「黒の迷宮 - 凝視の刻 - 」と題し、木下 晋・小林敬生・日和崎尊夫という3人の作家による黒線が織りなす細密な凝視の世界をご覧ください。第3回目は、日和崎尊夫についてご紹介します。

日和崎尊夫（昭和16～平成4年）は、世界的にも衰退していた木口木版の技法を現代に甦らせた現代木口木版画のバイオニアとして知られています。木口木版は、堅い木を水平に輪切りにした面（木口）を、銅版用のビュランやノミで彫って版を作ります。従来、本の挿絵の印刷技術として18世紀頃、西洋で発達したのですが、写真製版技術が開発されると、急速に衰退していきます。日和崎尊夫は自らのメッセージを伝える素材として着目し、これを芸術として蘇生させました。現在では日和崎の作品に影響された小林敬生ら幾人かの版画家によって独創的な芸術表現の手段として制作されるようになりました。

日和崎尊夫は、昭和16年、高知県高知市に生まれました。高校卒業後、武蔵野美術学校で西洋画を学びます。この頃、木版の講習を受けたことがきっかけで版画制作を行うようになり、昭和39年高知に戻った時、木口木版画に出会います。それからは独学でその技法を習得し、2年後には日本版画協会展で新人賞を受賞して注目されます。以後、木口を刻むことに喜びを感じながら精力的に創作活動を行い、フィレンツェ国際版画ビエンナーレ展での金賞を初めとして数々の賞を受賞します。

昭和43年頃、日和崎が強度のノイローゼにかかった時、『老子』と『法華経』を耽読し、『法華経』から『kalpa(劫)』という概念に開眼します。それは、「空想的な時間を単位とする期間。想像も計算も超越した極めて長い期間。」という概念を示し、無限感、宇宙的な奥行き、暗闇の中の光芒を表現する日和崎にぴったり符合するものでした。《KALPA X》は、この「kalpa」の概念を掴んだ作品で、細かいタッチによる抽象化されたリズムカルな形象が反復し増殖していくのが見てとれます。



KALPA X

たとえその星が
どんなに微少な存在であったにしろ
無限の宇宙で燃え尽きて
その虚空を引き裂こうとする時
何ものかの共感を呼びますだろう
深海の魚、貝類の魂
あるいは青空の風にゆれる草花の生命の中に

1975年9月10日

上記は日和崎が書いた詩です。「画家か詩人になりたかった」とっていた日和崎は酒を飲み、詩を口ずさみながら、宇宙の叙事詩を刻んでいきました。故郷高知で生育した樺の木、その年輪が刻まれた木口の断面を手でさすり、対話しながら即興で彫り込んでいく...闇の中から光を求めるがごとく、深淵なる小宇宙を生涯彫りつづけました。（吉村尚子 学芸主任）

「黒の迷宮 - 凝視の刻 - 木下 晋・小林敬生・日和崎尊夫」の会期は、平成18年1月4日(水)～2月5日(日)です。

友の会会員を、1月4日の開会式にご招待！
詳細は、次号の封筒をご覧ください。

展覧会回顧

特別陳列

吉田富士夫 - 手品師の息づかい -



吉田富士夫氏といえば“道化師”や“催眠術師”の一連の作品がすぐに思い浮かびます。これらは深いしっとりとした艶のある作品群なのですが、その前にはざらっとした

絵肌の白っぽい作品を描かれた時期がありました。当館の所蔵品でいえば、昭和50年の《トラトラ》、翌51年の《獅子舞》、《獅子と道化と馬の足》などです。この二者には常々異質なものを感じ、画業の歩みが判然としないという気がしていたのですが、今回初期の作品から晩年の作品までを一堂に並べさせていただいて、初めて、なるほどこういうことであったかと、感じ入った次第でした。

吉田氏は幼い頃より画家を志望しつつも、戦中に学業を終え、戦後まもなく陶磁器会社に就職して絵付けを職業とされます。そして、この時に水彩画を学ばれ、宮本三郎が率いる二紀会において水彩と墨を混淆した作品で頭角を現されるのでした。つまり、油絵と関わる前に、やきものがあり、次いで水彩があるので。《トラトラ》を描いたとき、吉田氏は既に46歳でしたが、油絵作家としてはまだ新人と言えたかもしれません。この白くざらついた画面は、国外展に出品するために日本画調を強調されたということもあるのですが、水彩から油彩への移行期における実験の意味合いもあったのだと思われます。この2年後、色調豊かで幻想味あふれる《仮面の告白》が描かれ、スタイルを確立するのでした。

それにしても、絵画とやきもの、この二者が生涯にわたって並行して行われていった吉田氏の創作は、実に豊かで幅広いものであったと、驚かざるをえません。作家ご本人にご覧いただき、思いを述べて貰えたらと、悔やまれてなりませんでした。（二木伸一郎 学芸専門員）

企画展示室

第90回公募写真展研展

12月14日(水)~19日(月)第7展示室)

東京写真研究会が主催する研展は、研究会(関東、中部、関西、北陸の4支部)の会員と、一般公募の2部門で構成され、約343点が展示されます。北陸から会員の部では、第90回研展記念賞に西村敏子、研展賞に伊藤方治、津田朝子、研展奨励賞に山田秀人、公募の部では、東京都知事賞に角越 長、東研賞に蔵 明雄、川向光郎、東研奨励賞に柴田朋子、杉野時男の各氏が受賞しました。

入場無料

連絡先 金沢市野町4 9 13 内島一郎

☎ 076 241 2279

第15回石川独立DO展

12月14日(水)~18日(日)第8・9展示室)

石川独立の前身は、昭和54年に県内在住の独立展出品者を中心にDO展として発足しました。日本のフォービズム(野獣派)の流れを汲む独立展は、自由で個性強烈な作家を輩出していることで注目を集めています。

出品予定作家

大泉佳広、大西佑治、大部雅子、金子顕司、京岡英樹、桑野幾子、小森初香、指江昌克、佐藤仁敬、田井 淳、南城 守、西又浩二、堀 一浩、前田さなみ、三浦賢治、三科琢美、水野寿代、山田裕之

入場無料

連絡先 金沢市小立野1 13 4 山田裕之

☎ 076 221 7792

第29回日創展&新院展選抜金沢展

12月21日(水)~22日(木)第8・9展示室)

日創展は会長丹羽俊夫(新院展副会長)の大作、理事長三宅厚史、事務局長今村文男の力作をはじめ、石川、富山、福井、岩手から幅広い年齢層の日本画約60点を、新院展(東京展)から会長石井宝山の作品をはじめ約40点を選抜して展示します。

主な出品者

北出朝之、保科 誠、柴田輝枝、南 好乃、中村勝代、松尾功一郎、福井淳一、村中博文、伊藤夏子、牛丸美代子、大窪昭子

入場無料

連絡先 金沢市窪1 223 丹羽俊夫

☎ 076 244 5916

マイ・ミュージアムをつくろう

県立金沢錦丘中学が企画した展覧会を開催

12月21日(水)~23日(金)第7展示室)

中学生がテーマを決めて選定した当館の所蔵品を展示するという、学校・美術館連携の展覧会企画が進行中です。現在、錦丘中学校の2年生がこの企画に挑戦しています。学校と美術館が協力し、一つの展覧会をつくるという取り組みで、昨年度から教育・普及活動の一環として行っています。

初回の授業では当館のホームページで所蔵品を鑑賞しました。生徒達はどんなテーマで自分たちの展覧会をつくっていかうかとやる気満々、興味津々の様子。とてもすてきな展覧会になりそうです。

中学生の感性とアイデアがいっぱい詰まった展覧会を是非ご覧ください。

入場無料

公開授業 12月21日(水)

(時間は未定です)

ジュニアガイド(中学生による作品解説)

12月23日(金)

(時間は未定です)

美術館の本

石川県立美術館所蔵品図録	3,500
- 石川県立美術館所蔵 - 茶道美術名品図録	2,500
- 石川県立美術館所蔵 - 九谷名品図録	2,000
前田利為と尊經閣文庫	2,000
前田育徳会の名宝 百工比照	1,500
九谷焼	2,000
石川県の工芸 - 江戸時代から現代まで -	2,000
隅谷正峯展 - 日本刀その神秘なる彩り -	2,000
蒔絵・人間国宝 寺井直次の世界	2,000
板谷波山の神々しき陶磁世界	1,900
大樋長左衛門の世界	2,200
彫刻家 吉田三郎展	2,000
北野恒富展	2,000
鴨居玲	3,000
畠山記念館名品展	2,200
日本の四季 - 春・夏の風物 -	1,200
香月泰男展	2,400

新刊

鴨居玲展 2,000
税込定価(円)

ミュージアムショップで販売中!!

郵送ご希望の方は当館へ電話でお問い合わせ下さい。

☎ 076 - 231 - 7580

文化財現地見学報告

今回は福井県の敦賀市・小浜市の寺院を中心とした文化財を見学する『海のある奈良～若狭地方を訪ねて～』と銘打った旅行でした。見学先のご住職や学芸員の方々は、ご参加いただいた44名の皆さんの熱意にお応えするように、丁寧な説明をして下さいました。また同行したガイドさんは、見学地以外の見どころを上手に補足したお話をされて、大変充実した旅行となりました。



初日はあいにくの雨模様で、午前中はまず敦賀市の見学でした。敦賀市立博物館では、芭蕉の旅した道筋を辿る「ほそ道追想～杖措きの地・敦賀より」の初日でした。同

西福寺にて じ道筋を辿りたいという

感想を持った方が多かったようです。次の西福寺では、ご厚意により、重要文化財「七佛所説神呪経巻第三」と「孔雀鎗金経箱」の特別公開がありました。

昼食の後、小浜市へ移動して国宝の三重の塔でつとに知られる明通寺へ向かいました。雨がかなりひどくなりましたが、国宝の本堂と三重の塔の美しさは言葉で言い表せられないものでした。そして初日最後の福井県立若狭歴史民俗資料館では、やはり企画展「若狭湾と中世の海の道」の初日。今回の旅行を総括するような展覧会でした。雨が小止みになったところでホテルへ向かい、その日の行程は終了。

二日目は素晴らしい秋晴れとなりました。ガイドさんの説明にあった、八百比丘尼の空印寺を朝食前に散歩された方も何人がいたようです。小浜湾を一望に見渡せる大部屋で朝食をとった後、妙楽寺へ。昨日の雨で埃が洗われたようで、鎌倉時代の建物で重文である、茅葺き屋根の本堂も、回りを囲む山の緑も美しく、集合写真を撮りました。続いて今回見学する寺では唯一、禅宗（臨済宗）の円照寺。小ぶりながら禅宗らしい凝った庭があり、

重文に指定された美しい大日如来像が印象的でした。昼食前に、東大寺へのお水送りの行事と、日本でただ一つの神仏混合寺として知られる、神宮寺へ行きました。まず柏手を打ってお参りする作法に驚かされ、あらゆるジャンルに及んだ、博識なご住職の軽妙な講話も楽しく拝聴しました。重文の本堂は、通常の美術建築史とは一線を画した不思議な造りで、実際にものを観ることの大切さを再確認しました。

昼食後、最初に見学した多田寺は、日本三大薬師如来の一つを本尊とする寺です。こちらのご住職からは鐘の正しい撞き方等々をご教示いただきました。また、回りの田園風景が一変するような、萬徳寺の庭園の美しさは、紅葉の季節にはかくや、というものでした。最後は元正天皇の御影と伝えられる、重文の十一面観音菩薩を本尊とする羽賀寺です。うっそうとした木々の間を通り、山に囲まれるように建てられた本堂。その中の仏像の数々からは、中世の頃にこの地が、大陸からの文化の窓口として栄えた名残を見ることが出来ました。

移動距離が比較的短いため、見学先を10件としましたが、多少詰め込み過ぎたようで、帰りのバスで何人もお疲れの様子の方がいらっしゃいました。予定の組み方に配慮が足りなかったと反省しましたが、たくさん観ることが出来てよかったと、嬉しそうに言って下さった方もありました。時間が押して、帰着時間が遅れてしまいましたが、参加者の皆さんのご協力により、無事に見学を終えることが出来ました。この場をお借りして、お礼を申し上げます。



妙楽寺にて

12月の行事案内 《入場無料(ギャラリートークを除く)・いずれも午後1時30分から行います》

月日	行事	内容	会場
12/3(土)	キッズ プログラム	至芸の世界を鑑賞しよう (西ゆう子 学芸主任) 小学生対象の講座です。コレクション展示を鑑賞しながらの講座になります。	講義室 コレクション展示室
12/4(日)	ビデオ鑑賞会	正倉院宝物9 華麗な宮廷生活(30分) 正倉院宝物10 古代文書の大図書館(30分)	ホール
12/10(土)	ギャラリートーク	石川ゆかりの京都の日本画家たち (西田孝司 学芸専門員) 展示室内で行われるため、コレクション展示の入場券が必要です。	コレクション展示室
12/11(日)	月例映画会	ミレー・コロ・クールベ (23分) 木の生命よみがえる 川北良造の木工芸 (33分)	ホール
12/17(土)	美術講座	デューラー 人と芸術 (織田春樹 学芸主査)	講義室
12/18(日)	ビデオ鑑賞会	正倉院宝物10 古代文書の大図書館(30分) 正倉院宝物11 大仏開眼への遙かな道(30分)	ホール

12月の全館休館日は24日(土)～31日(土)です。

作者の十代大樋長左衛門氏は、江戸時代から続く大樋焼の茶陶作りを継承するとともに、日展を中心に意欲的な創作活動を行い、平成11年に芸術院会員に、また平成16年には文化功労者となりました。

この作品は、成形後素地がまだ生乾きのうちにスタンプによって花模様を押してゆき、白象嵌を施す花三島の手法に大きな特徴があります。しかもその際に、模様を押し、大きさ、条数、押印する部位が入念な計画によって決定されていることにより、独特の諧調を生み出している点が注目されます。さらに白象嵌が映えるようにまず土をよく吟味し、加彩には柿釉を意識した鉄釉を、絶妙の濃淡の組み合わせによって駆使しています。そして口縁部に施された様々な飾りが、シンプルな器形に躍動感を与えています。

こうした表現技法は、いずれも作者の真摯な中国、朝鮮などの東洋陶磁研究に立脚したものであることは言うまでもありません。大樋氏は、自分は大樋の茶陶の世界にいるからこそ、他の焼物の判断ができると語っておられます。その言葉のとおり、本作には古典をよく洞察し、さらにその美を翻案し、現代的な美意識に適合させるという作者の卓越した力量が遺憾なく発揮されています。

折しも現在第2展示室で特別陳列「朝鮮のやきもの」が開催されていますが、そこに展示されている大樋美術館の所蔵品をはじめとする優品の数々と併せてご鑑賞いただくことによって、本作の特質がさらに深くご理解いただけるものと思います。

第5展示室 特集「至芸の世界」で展示中。



りん か か き
輪花「花器」

おお ひちょうざ えもん
十代大樋長左衛門 昭和2年(1927)~

昭和62年(1987)

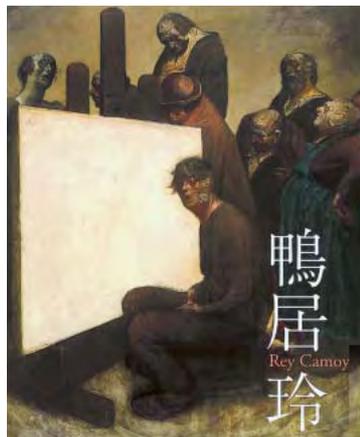
第19回改組日展

口径27.8 底径32.7 高さ25.0(cm)

— ミュージアムショップ通信 —

季節は冬...。冷たい風が身にしみます。しかし、当館内には熱いエネルギーが充満しています！それは、鴨居ファン待望の鴨居玲展が開催されたからです!! 没後20年という記念すべき展覧会で、今回は、油彩、水彩、素描など110余点を一堂に展示しています。いのちとは、芸術とは何かを問いかけ続けた鴨居芸術の全貌をご覧ください。

というわけで、今月は「鴨居玲展図録」をご紹介します。定価は2,000円。主な作品には解説があり、充実した内容になっています。是非、この機会をお見逃しなく！



鴨居玲展図録 (定価2,000円)

次回の展覧会

- 企画展 黒の迷宮 - 凝視の刻 - (第7~9展示室)
木下晋・小林敬生・日和崎尊夫
 - 特集 茶道美術名品展 (前田育徳会・第2展示室)
 - 特集 近代工芸と茶道具 (第5展示室)
- 平成18年1月4日(水)~2月5日(日)

休館日：12月24日(土)~31日(土)

石川県立美術館だより 第266号

2005年12月1日発行

〒920 0963 金沢市出羽町2番1号

TEL 076(231)7580 FAX 076(224)9550

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>